－所蔵作品紹介－

神田　一明　KANDA Kazuaki

窓のある室内

まどのあるしつない

作品データはこちら

椅子が三種類、ボトルとグラスの置かれたテーブル、クラリネット、コーヒー挽きなど、描かれたモティーフは日常見慣れているものである。窓外の風景も、作者の勤める旭川の教育大学からの眺めにもとづくという。しかし戸外のやわらかな光は室内にも差し込んでいるはずなのに、事物は床に影を投げかけてはいない。にもかかわらず、モティーフそれぞれの存在感や空間の奥行きはしっかりと表現されているため、見るものは事物や空間のリアリティを感じつつ、現実の事物を前にした時とは異なる世界を体験する。紫と青にひたされたような空間のなかで、なじみのあるモティーフがバランスよく配置され、またさまざまな色彩が響き合う様子に、落ち着きや静けさ、詩情を感じるかもしれない。だが画面下部に広がる有機的フォルムは秩序ある空間を侵食していくようでもあり、やすらぎにひたることを妨げ、不安を呼び起こすのではないだろうか。

作者は、静物のある室内を中心テーマとして描き続けてきた。かつて「私の造形は抽象絵画から始まる。モチーフの意味をとり去っても抽象絵画として成立するものでありたい」（註１）と述べたように、色彩と形の構成を絵画の基本条件として探求してきたのである。

しかしそれは、色と形を画面の中で戯れさせようというのではない。彼の信条の一端は、この作品が制作した年の次のようなことばにうかがわれる。「ある形が強く明確になり、空間的に確定されるほど、ものが喚び起こす現実味－存在感は、無限の連想を呼ぶ。絵のものがはっきりした性格を持ち、それが人を誘因する場合、その様な場合それはすばらしい絵と云えるだろう」（註２）。彼は色と形の組み立てを通して、事物の存在感や空間のリアリティを表現することにより、見る者が絵画の世界に入る余地を広げようとしたのではないか。そしてそこに、近年の作者のことばを借りれば「造形的な解釈如何によっては人生のすべてを投影する世界になり得る」（註３）絵画を実現しようとしてきたのであろう。それは絵画を作者の主観的世界に限るのを厳しく律して、絵を見る者に向かって開き、ゆたかな対話を成り立たせようとする態度でもある。

作者の神田一明（1934年生）は東京に生まれ、一家で北海道の鹿追町に入植、東京芸術大学学んだ後、北海道教育大学旭川分校で後進の指導にあたってきた。1977、78年には安井賞展にも選抜され、現在は全道展及び行動展会員として活動中。近年は、象徴性や表現主義的な要素を強めた作風を示している。

（註１）「朝日ジャーナル」1978年12月１日号
（註２）神田一明「絵と恋人」
「第36回全道展」図録、1981年
（註３）神田一明「６回展に思う」
「第６回北の表現者たち・グループ朔展」
パンフレット、1991年

旭川美術館だより「氷華」No.34（1995.１発行）「収蔵作品から」より